

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。  
Copyrighted materials of the authors.

2014 年度第 2 回研究会（通算 11 度目）

日時：2014 年 10 月 25 日（土）11:00-17:30

場所：一橋大学 東本館 2 階 演習室（東京都国立市中 2-1）

「霊長類社会学と共感 - なぜサル学は人気があるのか」

足立薫（京都産業大学）

本報告では「共感」に焦点をあて、霊長類の行動観察の特殊性を論じた。

日本の霊長類学は、個体識別をして観察対象のニホンザルに名前を与えることによって、観察を進めてきた。なかでも、パイオニアの一人である河合雅雄は、共感をもって対象に接することを重視し、単に識別するだけではなく、対象となるサルに人格を付与し、人間を観るようにサルを観ることが肝要であるとして、自らの観察方法を共感法と命名した。

共感法は観察対象と感情的に通じ合い、一つになることを理想とする。Asquith や de Waal は日本的な自然観によって可能になった手法であるとして、肯定的に学界に紹介した。自然を客観的对象物にとらえず、自然物に人格を見出す日本の文化的土壌だけでなく、臨床心理学で用いられるラポールの概念が共感法の基になったことも指摘された。擬人主義は通常、科学的態度からは退けられるべき否定的な手法とされるが、共感法では戦略的、積極的に擬人主義を採用し、共感の状態を作り出すことが「よい観察」をもたらすと考えられている。

さらに、黒田は対象個体と同じ場所を歩き、同じ食物を食べることで、対象の生活空間を、観察者自身のものとして共有することの重要性をあげ、生態的参与観察の概念を打ち出した。動物行動学では、観察の偏りを排し、共通の基盤で検証可能なデータを収集する手法として、個体追跡法が採用される。個体追跡法では、一個体を一定時間観察し、その個体のある行動をすべて記録することが目指されており、観察者は対象個体の背中を追いかけ、連続して同じ生活空間を追跡して利用することになる。個体追跡法では追いかける対象個体の視点に自らの視点を重ね合わせることにより、生態的参与観察が達成され、共感法による対象の把握はより一層強固になると考えられる。

一方で、個体追跡法は、ある個体の視点のみに観察者の視点が固定してしまい、社会全体の様相を見逃す危険性をもつ。報告者は異種の群れがひとつの集団を形成する混群現象の観察を通して、個体に視点を固定せずに、集団全体を見通しながら共感を達成する方法の可能性について報告した。

「分野の狭間で言葉をつくる—人工知能学会誌寄稿論文とその作成過程をめぐって—」

久保明教（一橋大学）

本発表では、発表者が日本人工知能学会の学会誌（（2014 年 9 月号、特集「人工知能が浸透する社会を考える」）に寄稿した論文「人間と機械の不調和に満ちた未来に向けて——将棋電王戦から考える」の内容とその作成過程を検討することを通じて、異

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。  
Copyrighted materials of the authors.

分野間の対話を通じていかなる知が産出されるのかという問いを探究した。

まず、機械と人間の関係を一方による他方の支配という図式で捉える 20 世紀に一般的となったテクノロジー観が、人工知能やロボットの社会的浸透について論じられてきた文脈、科学技術論における技術決定論と社会構成主義の対立、電王戦をめぐる将棋ファンの（ソフト寄り／棋士寄りの）見解のいずれの領域にも見られることを指摘した。こうした機械と人間の支配／被支配図式は、Bruno Latour らが近代的な知や制度の特徴として捉えた自然と社会の分割と両者の非対称的把握の所産として捉えられる。これに対して発表者は、電王戦において棋士とソフトの行為が互いの視点から翻訳されていく過程に注目し、両者の相互翻訳を通じて将棋というゲームをめぐる様々な可能性が生み出されていったことに指摘した。

さらに、寄稿論文の作成過程においては特集を担当した人工知能研究者と人類学者である発表者との間で様々な齟齬が生じたが、こうした齟齬もまた世界のあり方は客観的で機械的な力や法則によって規定され説明されると考えるか／人間の解釈や意味づけを通じて構築され説明されると考えるかという双方がよって立つ学問的前提の違いの現れであり、自然／社会の非対称的配置の一つの現れとして捉えられる。完成した論文において、発表者は双方の視点を交差させながら電王戦をめぐる記述を展開し、「実践的フレーム問題」および「記号離床問題」という、人工知能研究にとっても人類学にとっても部分的に既知であり未知であるような領域を説明する分析概念を案出した。このように、自然／社会の非対称的配置に基づく齟齬を伴う異分野対話においては、双方に依拠する視角や概念を相互に翻訳しながら現象を記述し、そうした記述に基づいて中間的な概念を生み出すことで方法論や分析対象の再構成を伴う新たな知のあり方が可能になるであろうことを示した。